

教 育 長 様

研究コース
グループ研究 A
校園コード（代表者校園の市費コード）
561155

代表者 校園名： 大阪市立本田小学校
 校園長名： 錢本 三千宏
 電 話： 06-6581-15631
 事務職員名： 喜連 尋滋
 申請者 校園名： 大阪市立本田小学校
 職名・名前： 校長 錢本 三千宏
 電 話： 06-6581-1531

令和 2 年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	グループ研究 A	研究年数	継続研究（3年目）
2	研究テーマ	資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実践的研究 ——効果的にICTを活用するための授業づくり——			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を端的に記載してください。</p> <p>昨年度、大阪市教育振興基本計画の施策「ICTを活用した教育の推進」を効果的に行うため、「逆向き設計論」で「理解をもたらすカリキュラム設計」を研究してきた。国語科・社会科・算数科・理科・体育科・音楽科を中心に理論研究や授業研究を行ってきた。これらの研究は大学研究者から注目され、西岡加名恵京都大学大学院教育学研究科教授、奥村好美兵庫教育大学大学院教育研究科准教授の編著で日本標準より「逆向き設計」実践ガイドブックとして出版された。</p> <p>本年度は、これらの研究をICTの活用の観点から整理し、「学習する教育内容が社会生活とどれほどかかわっているか、つながっているか」というレリバンスを重視したパフォーマンス課題に焦点を絞って研究を進める。それが、深い学びにつながるICT活用を実践につながると考える。また、昨年度本格実施した本校のプログラミング学習についても継続的に研究する。</p>			
4	研究内容	<p>継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。</p> <p>中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（2016年）において、「資質・能力」のバランスのとれた学習評価を行うために「パフォーマンス評価」が推奨されたことなどを受けて「逆向き設計」論にもとづくカリキュラム設計やパフォーマンス課題・評価は非常に注目されている。以下の方法で「資質・能力」のバランスのとれた学習評価について全市教員の力量形成を図りたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ICTを効果的に活用するため、「理解をもたらすカリキュラム設計」について継続研究し、公開講座を行う。 ●上記の研修に基づき、本校教員によるレリバンスを重視したパフォーマンス課題でICT活用の実際を公開授業を行い、大学研究者からの指導を仰ぐ。また、同時にプログラミングについても公開授業を行い、今後のプログラミング教育の在り方を模索する。 教科は国語科、社会科、理科、算数科、家庭科、体育科で公開する。 ●ICT活用を促進するため、「逆向き設計」論を活かした教員研修の在り方を共有できるようにする。学校のカリキュラム・マネジメントへの位置づけ、教師の力量形成をとらえる長期的ルーブリックとチェックリスト、評価にかかる教師の力量形成の実践などの研修会を行う。 			

研究コース

グループ研究A

代表校校園コード

561155

代表校園

大阪市立本田小学校

校園長名

錢本 三千宏

		日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。 5月 昨年度の研究で本校のカリキュラムが社会とのレリバンスが弱いという課題が明確になった。「逆向き設計」実践ガイドブックの講読会を開催する。先行研究を実施した後、研究テーマ・目的・内容・見込まれる成果等の検討する。 6月 「パフォーマンス課題づくり用ワークシート」を活用して「パフォーマンス課題のシナリオに織り込む6要素(目的・役割・相手・状況・作品・観点)」を明確にしたパフォーマンス課題作成研修を行う。作成研修と並行して、「単元設計力のチェックリスト」、「パフォーマンス課題の作成力チェックリスト」で教員の実態を把握・分析する。 7月 研修プログラムを作成する。「逆向き設計」の指導と単元計画についての公開講座を実施する。「教科の本質を追求する単元構想」「学習者主体の授業構想」「目標に準拠した評価の方法」「カリキュラムの改善」を核としたより高度化した研修プログラムを作成する。(公開授業に向けた授業者、指導案の形式検討など) 8月 先進校の研究大会に参加する。(参加後、内容の周知及び研究内容に活用) 9月 公開授業の指導案作成する。中間評価として「パフォーマンス課題の質」の問題、ルーブリックの表現や設定方法、教科を学ぶ意義としての永続的理解の吟味、パフォーマンス課題に取り組むときのICTの活用方法などを整理し、集約する。 10月 プログラミング教育についての研修会。ロボットやドローンを用いたプログラムを作成する研修とともに、低学年におけるプログラミング的思考を育てる研修会を株式会社ウィーリングを招聘して行い、公開授業の内容を検討する。 11月 第1回公開授業指導案検討会 12月 第2回公開授業指導案検討会 1月 参加者アンケートの作成 2月 ICTを効果的に活用する授業を公開する。あわせてプログラミングの授業公開をする。参観者のアンケート実施、本校教員の単元設計力、パフォーマンス課題の作成力をチェックリストで評価し、6月の評価との比較・分析をし、研究結果の考察を行う。
5	活動計画	大阪市教育振興基本計画に示されている、 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 および 教員の資質や指導力の向上 について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。 【見込まれる成果1】 ICTの授業での活用が「児童の活動だけが活発で学びの少ない活用」になることを回避するための「教科の本質を追求する単元構想力」を教師が身につけることができる。 《検証方法》 「パフォーマンス課題と評価」、「知の構造と評価方法・評価基準」、「教科の見方・考え方」である「本質的な問い合わせ」「永続的理解」等についてチェックリストを作成し検証 【見込まれる成果2】 ICTを活用することによって育てることができるようにするため、教科における「使えるレベル」の学力と学習者主体の授業構想力を教師が身に着けることができる。 《検証方法》 「ここ一番で学習者に授業ゆだねる授業展開力」「多様な学習形態」「目標の明確化」「パフォーマンス課題に向けた授業展開力」等についてチェックリストを作成し、アンケートで検証する 【見込まれる成果3】 作成したルーブリックを用いてICTによるプレゼンテーションなど児童の作品を評価することにより「目標に準拠した評価」の実践力を身に着けることができる。 《検証方法》 「資質・能力」の3つの柱に対応する有効な評価方法、「主体的に学習に取り組む態度」を評価できるか。「ゴールフリーの」評価を行えるか等についてアンケート調査を行う。 【見込まれる成果4】 ICTを授業で活用する場合、カリキュラム・マネージメントは不可欠である。授業実践を通してカリキュラム改善をする力が身につく。 《検証方法》 「カリキュラム評価・改善」「ルーブリックづくりからの指導改善」「ICTを活用したポートフォリオからの評価改善」等についてアンケート調査を行う。
6	見込まれる成果とその検証方法	

研究コース

グループ研究A

代表校校園コード

561155

代表校園

大阪市立本田小学校

校園長名

錢本 三千宏

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果5】 「深い学び」を児童に提供するため、「説明することができる」「解釈することができる」「応用することができる」「パースペクティブを持つ」「共感することができる」「自己認識を持つ」という理解の6側面を充実させた授業実践ができる。 《検証方法》 「理解の6側面」にもとづく教科ごとの「パフォーマンス課題」例を公開する。</p> <p>【見込まれる成果6】 「本質的な問い合わせ」を吟味することで授業の中での「問(発問)」を整理することができる。 《検証方法》 ある内容またはトピックから、「とっかかりの問い合わせ」「先導する問い合わせ」「手引きとなる問い合わせ」「本質的な問い合わせ」のワークショップを行い、4つのタイプの問い合わせの例を公開する。</p>				
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 報告書提出日（令和3年2月22日）までに必ず行ってください。</p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="409 758 1441 826"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 3 年 2 月 10 日</td> <td>場所</td> <td>大阪市立本田小学校</td> </tr> </table> <p>◆代表校園HPでの共有【必須】</p> <p>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p> <p>「逆向き設計」の指導と単元計画についての公開講座</p>	日程	令和 3 年 2 月 10 日	場所	大阪市立本田小学校
日程	令和 3 年 2 月 10 日	場所	大阪市立本田小学校			
8	代表校園長のコメント	<p>「教えるという営みがおろそかになっている」ここ数年特に感じる。これは大阪市のみの現象ではない。世界的な現象である。オランダの教育学者ガート・ビーストは様々な教育改革の中で「指導より支援が重要」というドクサ(臆見)が教師の世界に流布し、教師を「壇上にいる賢人」と揶揄し、「子どもの傍らにいる支援者」にし、さらには「子どもの後ろにいる仲間」にさえしてしまっていいだろうかと警鐘を鳴らしている。「楽しい授業」「子どもの笑顔があふれる授業」「子どもの主体性を大切にした授業」、なるほどこれらの言葉は心地いい響きがする。しかし、これらの言葉は授業の現象を表す言葉であって、子どもが獲得すべき教科の本質が見えてこない。教師の本分は「教科の本質」を見いだし、「教科本来の魅力」に子どもをで合わせ、教材と子ども、教師の間で対話を引き起こし、子どもの中にある「真正の主体性」を生み出すことである。「指導の復権」これが本研究のテーマである。大量採用されている大阪市の若い教師に「教えることの大切さ」「教えることの尊さ」「教師の尊厳」「学ぶことの深淵」を伝えたい。</p>				